

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 24 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381244

研究課題名(和文) 養護教諭特別別科における実践的指導力育成のためのカリキュラム構築

研究課題名(英文) Curriculum construction for practical leadership development in the one-year Yogo teacher special course

研究代表者

河田 史宝 (KAWATA, HITOMI)

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号：10451668

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、1年制養護教諭特別別科における実践的指導力を育成するためのカリキュラムの構成を検討することである。健康診断演習、養護実習、保健室ボランティア養護実践研究を中心に学生の学びを分析した。その結果、1年間を見通したカリキュラムデザインの重要性が示唆された。このことは学生が1年間の見通しを持つことにも繋がり重要である。専門科目の講義内容を関連させ、講義と演習、演習と演習、養護実習を意図的に横断的に関連付け、学生が統合して考える時間を確保する必要がある。

研究成果の概要(英文)：This study was conducted to examine a curriculum structure that is capable of developing practical leadership in the one-year Yogo teacher special course. Health examination exercises, practical training for student Yogo teachers, school health office volunteers, and the Yogo teacher practice research were analyzed to assess learning by students. Results suggest the importance of a one-year outlook for curriculum design leading students to regard their prospects for the year. To associate the lectures of specialized courses, lectures and exercises, exercises and exercises, and for intentional cross correlation with Yogo teacher practice, the need exists for students to secure time to think and integrate the curriculum contents.

研究分野：養護実践学 教科教育学

キーワード：養護教諭特別別科 カリキュラム構成

1. 研究開始当初の背景

(1) 教員養成は、開放性の原則により一般大学と教員養成系大学とがそれぞれの特徴を發揮しつつ行われている。養護教諭の養成においても同様であるが、特徴的な点として、看護師免許状および看護師受験資格を持つものが入学し、1年間の養成期間で学んだ後養護教諭一種免許状を取得できる養護教諭特別別科(指定養護教諭養成機関)がある。この課程は看護学を基盤として養護教諭の専門性を身につける課程である。複雑化、深刻化している現代的健康課題に対応するためには、専門的知識及び組織や関係諸機関との連携能力はもちろんであるが、学校保健活動の中核として動くことができる実践的な指導力を持った養護教諭が求められている。

(2) 医療機関である病院での実習と教育現場での実習ではおのずと求められる専門性も実践力も異なる。医療機関では、医師や同僚の看護師、検査技師等多くの医療専門職の中で働いているが、学校では養護教諭が1人職として勤務することが多く、専門的な判断を求められることも多い。そのため、経験年数に関係なく養護教諭としての判断や対応、指導、連携などの実践力は新規採用時から求められている。実践的指導力は、講義、演習、実習や様々な体験を通して獲得している。そのため、養護教諭特別別科の1年間に実践的指導力を培うためには、講義内容、養護実習、保健室ボランティア、健康診断演習等をどのような順序で組み立てデザインしていくかが重要である。

2. 研究の目的

本研究では、養護教諭特別別科の学生の実践的指導力を高め、理論と実践を統合した効果的な養護教諭育成カリキュラムを構築することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 養護教諭特別別科で学ぶ学生を対象に、学生自身が学んだと考える学びを明らかにする。その結果をもとにカリキュラムデザインを行う。

4. 研究成果

(1)健康診断演習の順序性

健康診断演習では、模擬授業、附属小中学校演習、市内小中学校演習の順序により講義内容を組み立てた。その結果、模擬演習の学びと【児童生徒理解と指導】は市内小中学校演習に、【検診のコーディネート】は市内中学校演習に活用されていた。また、附属小中学校演習での学びは、校種の異なる学校で応用されていた。この結果から、健康診断演習の順序性は有効であることが示唆された。また、演習後の省察やシェアリングを通して、既習知識を応用し、実践力となっていること

が考えられた。

(2)ピア・エデュケーションによる性教育

高校1年生を対象に養護教諭特別別科の学生が行っている性教育では、96.0%の高校生が【年齢が近く話しやすい】【新しい知識、大切なことが学べる】と肯定的に捉えていた。また、学生も「実際に高校生と共に学ぶことで、高校生の柔軟な発想に触れること、高校生の本音を聞くことができたため、高校生と関わる際の参考になった」「養護教諭の立場で保健学習を行う際に気をつけるべきことや今後の自分の課題を見つけることができた」授業を行うことで高校生に対する理解や授業に対する課題をとらえており、よい経験になったといえる。

前期「養護実践(健康診断演習を含む)」での経験は、前期「学校保健 A:学校における保健教育」や後期「学校保健 B:現代的な健康課題、性・エイズ教育」の講義に関連付けることができた。

(3)保健だより作成のための力量形成

保健だよりは、次のように検討した。

表1 保健だより作成のための順序の検討

科目	時期	内容
養護概説	5月	保健だよりを活用した健康教育(保健だより作成)
養護実習	9月	養護実習で保健だよりを作成
実習事後指導	10月	養護実習で活用した保健だよりの改善
養護実践(健康診断演習を含む)	11月	紙面情報をわかりやすく伝えるための美術的技法

科目	時期	内容
養護概説	5月	保健だよりを活用した健康教育(保健だより作成)
養護実践(健康診断演習を含む)	6月	紙面情報をわかりやすく伝えるための美術的技法 保健だより修正
養護実習	9月	養護実習で保健だよりを作成
実習事後指導	10月	養護実習で活用した保健だよりの改善

11月に行っていた「紙面情報をわかりやすく伝えるための美術的技法」では、学級通信を活用した学級経営をしている現職の美術担当教員に講義を依頼した。その講義では、紙面構成のみならず「保健だよりに対する考え方」を学生が学んでいたことが質問紙調査調査により分かった。そのため、11月の講義を養護実習前に移動させ、学生が書いた保健だよりを事前に講師に送付し、改善点を含んだ講義内容を依頼した。このことから、学生は、自身が作成した保健だよりを改善し、養護実習で講義からの学びを活用して保健だよりを作成することができていた。さらに、養護実習事後指導で、作成した保健だよりを全員で交換し、シェアリングを行う中で他者の意見から学んでおり、この学びの順序の有効性がうかがえた。

(4)学校保健計画及び学校安全計画を作成するカリキュラムデザイン

学校保健計画、学校安全計画の学びの順序を表2のように検討した。

表2 学校保健計画、学校安全計画の学びの順序

科目	時期	内容
養護概説	6月	保健室経営と学校保健計画
学校保健A	7月	学校保健計画、学校安全計画 演習
養護実習	9月	配属校における学校保健計画、学校安全計画
保健室経営と組織活動	10月	保健室経営計画立案
学校保健B	10月	学校保健の推進
保健室経営と組織活動	1月	学校保健計画を養護活動につなぐ工夫

学校保健計画や学校安全計画を実習配属校に合わせて作成する経験を含めて学びの順序を検討した。学校保健Aでは7月に、学校保健計画、学校安全計画の作成を演習として行う。その後、実習配属校の年間行事計画や学校環境に合わせて、学生が作成し、養護実習期間に実習配属校で指導を受ける。実習後は作成した計画と合わせて保健室経営計画の立案と学校保健の推進を考え、1月には学校保健計画を養護活動にどのようにつないでいくかを考える流れである。養護実習配属先の指導教員からは、実習配属校に合わせた計画が立案できており、参考になると評価を得た。

(5)1年間を通して行う養護実践研究

表3 養護実践研究年間計画

時期	内容
4～5月	テーマを決める
6～7月	研究計画作成
10～11月	分析、図表作成
12～1月	考察、論文の形式にまとめる
2月	養護実践研究発表会
	養護実践研究集録作成

1年間の講義は、学生を希望するテーマごとに5グループに分けてグループ研究を行っている。養護教諭特別別科入学前の大学等で研究を行っている学生もいれば、行ったことのない学生もいるのが現状である。通年で行うことにより、前期は研究計画を、後期は研究のまとめを行うことになる。2011年度からは、2月に養護実践研究発表会を開催し、作成した論文は養護実践研究集録としてまとめた。2014年度は2グループが学会で口頭発表を行い、そのうち1グループは学会誌に論文が掲載された。

年度別に研究方法を表4に示した。

表4 年度別研究方法

	文献調査	インタビュー	質問紙調査		トライアン ギュレーション	合計
			紙面	Web		
2011	5	1	1	0	0	7
2012	3	0	4	0	0	7
2013	0	0	5	0	0	5
2014	0	1	4	0	1*	6
2015	0	2	1	1	1**	5
合計	8	4	15	1	2	30

*: 質問紙とインタビュー ** : Webとインタビュー

研究方法として、文献研究が多かったが、インタビュー調査、Web調査、トライアンギュレーションと研究方法も多様になっていた。このことは、前半に面談時間を設け、研

究目的と研究方法を検討していることが影響していると考えられる。また、養護実践研究集録を作成したことにより、すでに行われた研究内容や研究法を参考にしていることも影響していると考えられる。在籍する学生は、研究経験のない学生もいるが、一人での研究ではなくグループによる研究をすることにより、研究を進める中で学生同士が教え合っている状況もある。論文文化や発表することにより研究への理解も進んでいると捉えることができる。

(6) 食育に関する学び

給食指導や食育に養護教諭が関わることは多い。しかし、ランチルームでの給食体験のない学生や栄養教諭からの保健指導を受けたことがない学生がほとんどである。栄養教諭は平成17年に新設されたことから、在学中の学生は経験知がないのが現状である。

ランチルームで学校給食を行っている学校参観後の質問紙調査から学びの内容をJ法により分析した。ランチルームの参観からは【ランチルームの有効性を感じた】【将来の食生活の乱れを防ぐ効果】【安心して学べる配慮】【養護教諭のかかわり】、栄養教諭のレクチャーからは【栄養教諭と養護教諭の連携の重要性】【保護者とともに指導】【栄養教諭の職務理解】【食分野での学び】を得ており、学生は学校参観の機会を【学校給食と栄養教諭の理解】をするとともに、参観は【現場での学びが多い】【学校現場の理解につながる】と考え、それらが【大学での学びを深化させる】と考えていた。これらのことから、ランチルームでの学校給食を行っている学校の参観は、食育の理解、学校現場の理解、学びの深化となり、観察参加型実習として成り得ることが示唆された。

(7) 保健室ボランティアで養成される力量

保健室ボランティアは、養護教諭の指示の者活動補助に従事することを通して、学校教育における養護教諭の教育活動を知ることが目的の一つであり、現場での学びから大学で学習する上での問題意識を得ることにある。この活動は、養護教諭特別別科の教育課程外の活動として位置づけ、2011年度から市及び県との連携事業の一環として実施している。希望学生を対象に、受け入れ校(小・中・高等学校)の協力により行っている。

この保健室ボランティアは、学んだことや気づいたことが講義に役立っており、講義への活用や講義への活用されていることから、講義と実践との往還がされていることが示唆された。また、学生は、保健室ボランティアでの経験から、子供への言葉かけ75.6%、養護教諭観68.3%、子供観63.4%、保健室の在り方61.0%、指導観41.5%、教職員との連携41.5%、保健室での相談の在り方36.6%など、ものの考え方や見方に影響を受けていた。さらに、参加した学生の87.8%は、保健

室ボランティアを通して自分自身の課題を見つけていた。

保健室ボランティアの単位化に関しては、賛成は 37.5%にとどまった。「保健室ボランティアの方が養護実習よりも学びたいことを提案し学びたいことについて理解を深められる」「単位化されると自由度がなくなる」などの意見があり、保健室ボランティアが学生の学びたい意欲と現場での実践により成り立っていることが推察でされた。このことから、保健室ボランティアを行っていくことの意義が確認できた。

(8) 学びの見通しができるノートづくり

1 年制の養護教諭特別科は、先輩との交流は少なく、学生自身も 1 年間の学修をイメージできにくいことが学生面談から分かった。当初の予定には含めていなかったが、研究協力者の協力を得て「養護教諭になりたい人のためのノートづくり」を行い、ノートを作成した。作成したノートは平成 28 年度入学生に活用しその後の評価を行うことにした。

研究全体を通して、1 年間を見通したカリキュラムデザインの重要性が示唆された。このことは学生が学びの見通しを持つことにもつながる。専門科目を関連させ、講義と演習、演習と演習、養護実習、保健室ボランティア等を意図的に横断的に関連付け、統合して考える時間の設定が必要である。そのためには、科目ごとの講義内容を全体的に把握し、系統的な関連、内容の精選を図る必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8 件)

河田史宝、ランチルーム活用学校の参観を通して得た学びの内容、教育実践研究 42、金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター、2016 (印刷中)、査読有

横田あゆみ、小野里恵、高山明子、谷口真璃恵、徳山由貴、河田史宝、月経痛のある女子中高生の対処行動とコントロール感 - 鎮痛剤使用に焦点を当てて -、日本教育保健学会年報第 23 号、33-43、2016、査読有、金沢大学学術情報リポジトリに掲載予定

河田史宝、養護教諭特別科の学生が行った性教育授業に対する生徒の受け止め方：高校 1 年生対象に、教育実践研究 41、43-54、金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター、2015、査読有

<http://hdl.handle.net/2297/44451>

河田史宝、公立小中学校における健康診断での既習知識の活用：養護教諭特別科において、教育実践研究 41、55-66、金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター、2015、査読有

<http://hdl.handle.net/2297/44471>

河田史宝、西澤明、保健だよりに対する学生の意識と講義後の意識、教育実践研究 40、49-59、金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター、2014、査読有

<http://hdl.handle.net/2297/40743>

河田史宝、学生が健康診断演習から得る学びの検討、教育実践研究、40、61-68、金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター、2014、査読有

<http://hdl.handle.net/2297/40744>

河田史宝、保健室ボランティアにより養成される力量、教育実践研究 39、33-44、金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター、2013、査読有、

<http://hdl.handle.net/2297/36378>

河田史宝、養護実習における学生自身の学び：養護教諭特別科において、教育実践研究、39、45-55、金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター、2013、査読有

<http://hdl.handle.net/2297/36379>

[学会発表](計 2 件)

横田あゆみ、小野里恵、高山明子、谷口真璃恵、徳山由貴、河田史宝、月経痛のある女子中高生の対処行動とコントロール感 - 鎮痛剤使用に焦点を当てて -、第 12 回日本教育保健学会、2015.2.22、日本福祉大学半田キャンパス (愛知県・半田市)

奥野綾乃、赤羽南美、中安智里、園部あいら、南沙也加、河田史宝、教員のメンタルヘルスにおける養護教諭の役割の検討、第 12 回日本教育保健学会、2015.2.22、日本福祉大学半田キャンパス (愛知県・半田市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河田 史宝 (KAWATA HITOMI)
金沢大学・学校教育系・教授
研究者番号：10451668

(2) 研究協力者

水上 洋子 (MIZUKAMI Yoko)
寺島 康江 (TERASHIMA Yasue)
丁子 智恵子 (CHOJI Chieko)
竹俣 由美子 (YAKEMATA Yumiko)
渡辺 誓代 (WATANABE Chikayo)